

I 校内研修計画

研究主題

子どもが輝く学習の創造

～子どもの思考・表現する場を大切にしたい授業づくり～

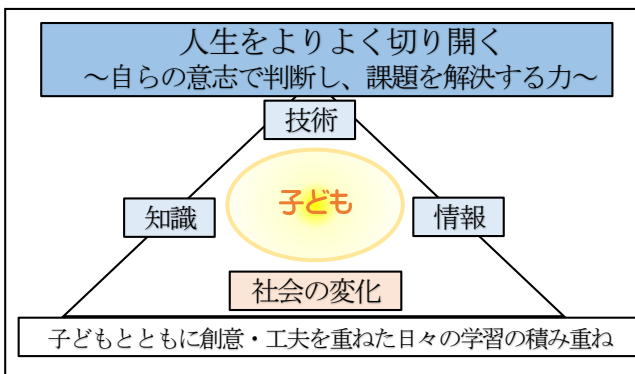
1 主題について

子どもを取り巻く社会は、知識・情報・技術をめぐる変化がますます速くなり、急速な情報化や日本という国を超えて地球規模に拡大して引き起こされるといった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている。観音寺市柞田小学校区においてもインターネットの普及により、都市部と変わりなく子どもたちが、多くの知識・情報・技術といった社会的変化に触れる機会が増えている。

子どもたちが、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合っていて関わり、その過程を通して、自らの可能性を見つけ、存分に力を発揮し、自分の人生を切り開いていけるようにすることが重要である。

本校では、昨年度まで道徳教育を核とした研究を積み上げてきた。日々の授業や活動の中に、道徳教育の視点を盛り込むことで、子どもの自己肯定感を高めることを目指してきた。また、生徒指導上の問題が少なくない本校においては、子どもたちの道徳性を育み、真に問題行動等の抑止力として機能するために、生徒指導と関連付けた指導を継続して進めてきた。そこで、本年度はこの研究を基盤に、子どもたちが人生をよりよいものにしていく力を身に付けるために、子どもとともに創意・工夫を重ねた、日々の学習を大切にしていきたい。

そして、子どもたちが、毎日の学習や生活において、自分の意志で判断しながら、課題を解決していくことができる力を育成することが、「子どもが輝く学習の創造」につながると考える。



2 副主題について

日々の授業の中で、一人一人の子どもが輝くためには、全ての子どもが「分かった。おもしろい」と感じる事が大切である。子どもたちが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び、つまり、学習指導要領に示される「深い学び」を目指すことである。

「見方・考え方」は、新しい知識・技能をすでに持っている知識・技能と結び付けながら、思考力・判断力・表現力を豊かなものとし、社会や世界にどのように関わるかの視点や姿勢を形成したりするために重要なものである。そこで、本年度は、まず教師が、各教科等の「見方・考え方」を働かせる子どもの姿とはどのようなものか、どのような状態を「深い学び」と考えるのかを明らかにしたい。そして、期待する学びの姿を質の高いものとしてイメージし、授業改善を行う。そのためには、授業の中で、子どもが自分なりに考える過程、表現する過程を大切にしたい授業づくりを行うことが大切である。

子どもが、「見方・考え方」を働かせながら思考し、自分の思いや考えをしっかりと表現できるようにすることが、全ての子どもの笑顔が輝く教室になると考える。

3 研究の内容

今年度は、子どもの思考・表現する場を大切に授業づくりについての研究を行う。昨年度の学習状況調査等の分析からも、本校の児童は、思考力・判断力・表現力等に課題があることが分かった。そこで、「思考力・判断力・表現力等」に重点を置いて、授業改善を進める必要があると考えた。

思考力とは、問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせて、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる。

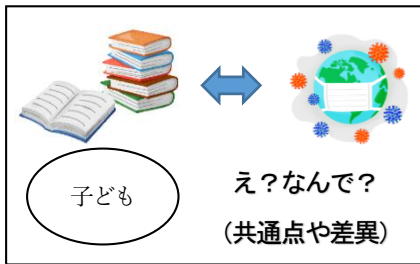
以下に示す研究の視点や方法において、「問題を考えてみたい！解決したい！」と子どもが思うような授業開始の興味・関心をひく一助としたい。また、問題解決的な学習をねらいとしても、視点1を設定した。

(1) 視点1 「問いの質を高める導入の工夫」

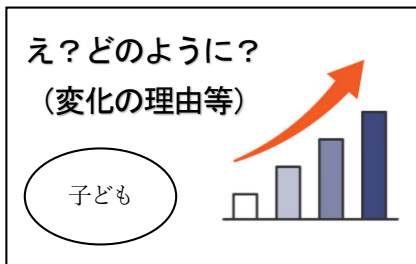
授業の始まりを支える導入の工夫と問い作りは、子どもの興味・関心を高めるためにとても大切である。問いの質を高めることが子どもの思考力や判断力等を養う上で重要であると言える。そこで、本校では「問い」の在り方こそが研究の出発点と考え、視点1を設定することとした。

以下の図に示すような導入によって生まれた疑問や子どもの解釈や判断のずれから生まれる疑問を大切にしたい問い作りである。

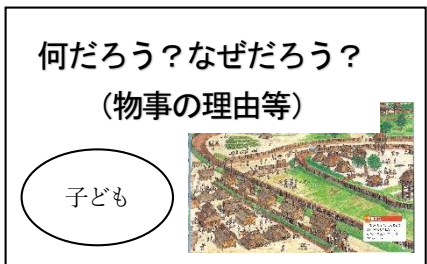
パターン「あれ？」



パターン「どのように？」

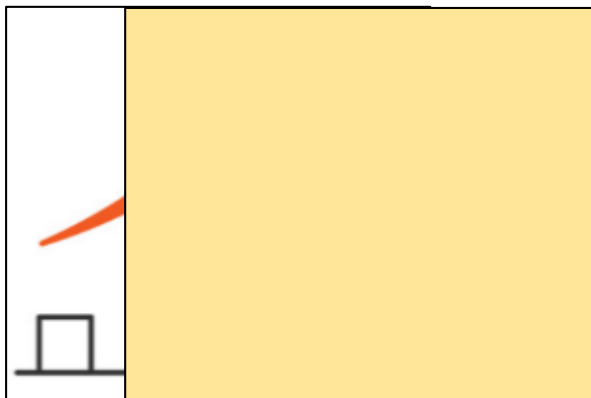


パターン「?を見つけて」

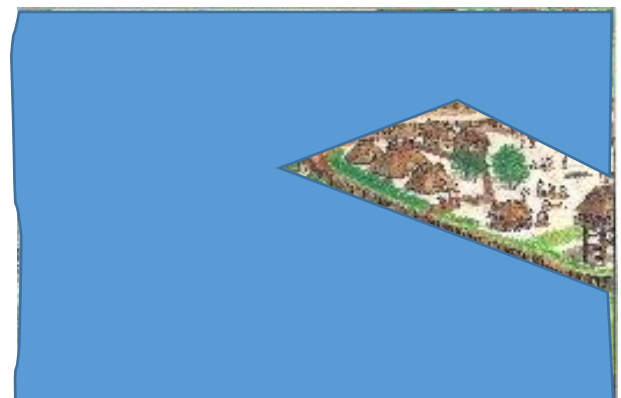


また、導入時に誰もが分かりやすい工夫を行うことも大切である。例えば、文章や資料を限定的に見せる方法や変化を捉えやすい提示の仕方を行うことである。

問い作りや提示方法の工夫は、ここに示したものも含めて、単元の内容に合わせた最適な方法を見出していくことを大切にすることとした。



例①【段階的に見せる】



例②【限定的に見せる】

以上のような情報を教師が選択して、導入の工夫を行うことによって、子どもの思考が促進され、「深い学び」に向かっていくと考える。

(2) 視点2「思考を助ける発問・助言・資料提示の工夫」

学びの「深まり」の鍵となるものとして、全ての教科等で整理されているのが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。「見方・考え方」は、新しい知識・技能をすでに持っている知識・技能と結び付けながら、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視点や姿勢を形成したりするために重要なものである。

本校では、以上のことを踏まえ、授業の中の考察する場面に焦点を当てた視点2を設定した。

【考察する力について】考察とは、物事を明らかにするためによく考え調べることとある。

考察する力とは、授業の中で出てきた考えや事実を比較・分類、総合したり、関連付けをしたりして様々な事実から一般的な概念をつくりあげていく思考だといえる。

授業を構想する際、令和3年度にまとめた各教科の「見方・考え方のまとめ」を参考にする。

まず、始めに、

段階1 文章、資料に書かれていることを整理し、類別、比較・関連、総合して考える。

考え、話し合いするためには、根拠となる文章や事実を見つけることが大切である。これらが考えるときの土台となる。この読み取る力を、授業や柝小タイムの中で養う。また、子どもの発言を板書する際、子どもの思考を促進する機能としての板書へと質的な転換を図ることが大切である。

仲間に分けると～【類別する発問・助言・資料提示】

類別の仕方としては、「どんな仲間に分かれる？」等と問うことが大切である。各教科で示されている「見方・考え方」に沿って分けたり、分けた後に「見方・考え方」として整理したりしても類別である。そして、整理する過程で大切なのは、この分ける過程を子どもに考えさせることである。

くらべて～【比較する発問・助言・資料提示】

ここでは、上記のような過程で読み取った後に両者を比較することで、共通点や差異、変化の様子をしっかりと読み取る。これらを比較するとき、教科書や教材の示されている視点や「見方・考え方」で整理していくと、比較しやすくなる。

教師は、「同じところは？」「違いは？」といった比較を意識した発問や助言、子どもの繋ぎ言葉を意識させることで、子どもに考えさせる手立てになると考えた。

つなげて～【関連付けさせて考えさせる発問・助言・資料提示】

読み取った事実Aと事実Bのつながりを考えていくには、何かしらの手がかりが必要になってくる。その際に、「見方・考え方」を広げて見える情報を提示することで考えが深まると考えた。授業の中で、「事実Aがあることで事実Bが変化したこと」等が分からなければ、関連が見えてこない。こういった事実を調べつつ、その因果関係を考えていくことが関連付けていく思考だと捉えている。捉えらせるために、文章や資料を繋いで考える発問や助言、板書や資料提示によって、考えを深めることができると考えた。

まとめると～【総合して考えさせるための発問・助言・資料提示】

総合については、「類別」「比較」「関連付け」を繰り返す中で捉えた全体像を言葉に整理する過程で行われる思考だと考えられる。単元の中盤及び後半で「習ったことはどんなことだったとまとめられる？」というような、大きな概念を問う発問を行い、習ったことを表現する適切な言葉をみんなで考える活動によってなされる思考だと考えている。一単位時間や単元の中で、このような振り返りを行い、大きく思考、表現させていきたい。

段階2 新たな「見方・考え方」に気付かせる発問・助言・問い返し・資料提示の工夫

【教師による教材分析、見方・考え方の整理】

「深い学び」の中核は、見方・考え方である。「見方・考え方」を働かせた学びを実現する授業が実践できれば、おのずと主体的・対話的で深い学びになると考える。

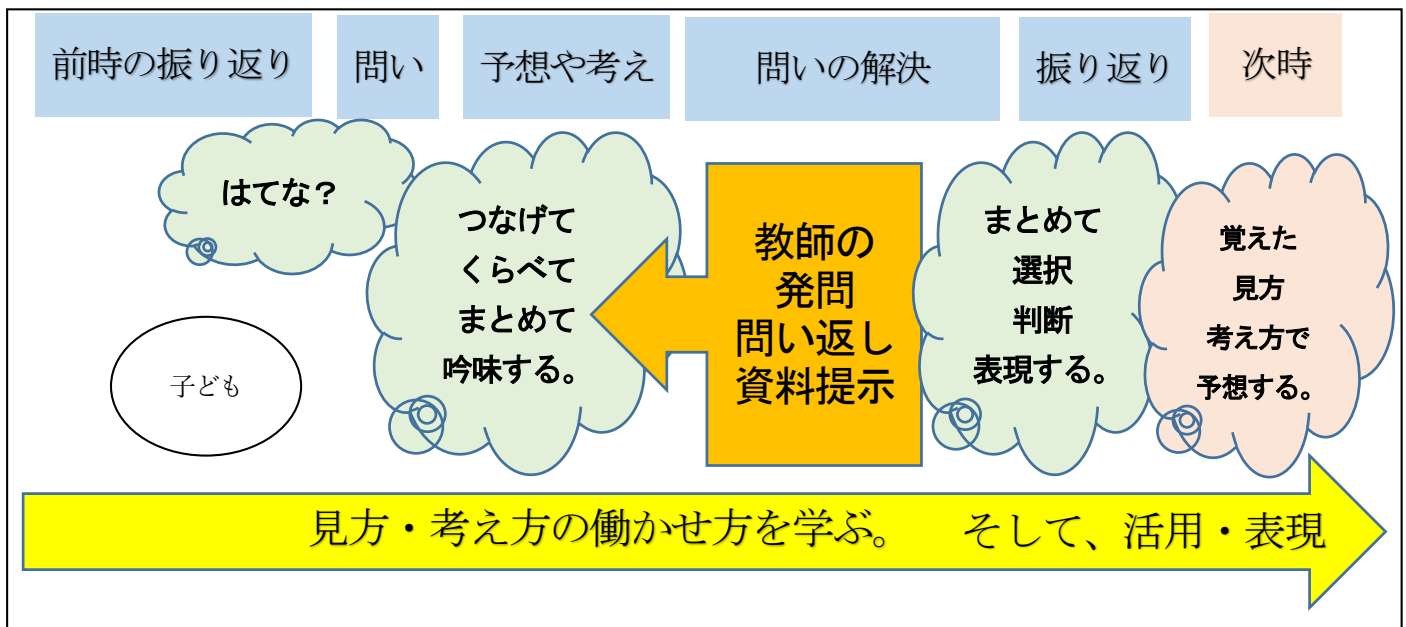
深い思考のためには見方が必要であり、見方は考え方を働かせることで初めて意味あるものとなる。

そこで、本校では、若年研修を活用して、「『見方・考え方』を働かせる」とは具体的にはどのようなイメージなのかを考え、学習指導要領から読み取りを行った。授業を構想する際には、それらの資料を活用して、教材分析や各教科の見方・考え方を働かせた授業実践となるようにすることが授業改善の第一歩であると考えた。

【新たな「見方・考え方」に気付く発問、資料提示等】

① 認識を広げるための支援

子どもたちだけの考えでは、学習対象に対して一面的、表面的な考えに陥ることがある。「見方・考え方」を育むためには、その状況を打破し、深い学びを目指す過程では、さらなる考えへと子どもたちを導いていく必要がある。「認識を広げるための支援」として以下のような支援が鍵となる。



このように捉え方を広げていくことで、文章や物事の一部を捉えて見てきたものから、さまざまな見方や考え方などの見えないものが見えるようになり、生きて使える知識が獲得されると考える。

これらの知識は汎用性が高く、どの教科や単元でも同様な見方・考え方として活用できる知識となる。

学習展開する中で、繰り返し考えることで、子どもたちの見方・考え方を働かせた思考力・表現力・判断力は育つものと考えている。

【思考の可視化による子どもの考えの整理、新たな見方・考え方への気づき】

授業の話し合い活動の中で、思考の可視化を活用する展開例もある。思考の可視化とは、名前磁石等を活用し、立場をはっきりとさせ、考えを語ることである。最初は、一面的に捉えていた子どもが、他の子どもの考えを聞く中でまた違った見方・考え方で物事の認識を深めていくことができると考えている。

以上のような考えときの工夫をさまざまな教科の単元や本時の中に、ちりばめて授業を展開することで、子どもたちの思考力や判断力、表現力を高めていきたい。

(3) 視点3「振り返りの工夫」

授業の最後には、まとめや分かったこと、感想を書くだけではなく、子どもが1時間(1単元)の中で、何ができるようになったのかきちんと自覚することができる振り返りが大切である。

本校では、振り返りの基準を検討して、子どもが主体的に振り返ることができる工夫として、以下のように設定している。

レベル1		
記述内容		
分かったこと、知ったこと	できるようになったこと	分かっていない、できないこと
レベル1のこつ	板書活用（色チョークの記述をつないで文章化する。）	
	～がよく分かった。～することでよく分かった。 具体的な定型文を活用する。	
レベル2		
記述内容		
レベル1に加え、感想を付け足すこと(どのような学びが面白かったか。また、興味関心が高かったかなど。)		
レベル3		
記述内容(上記に加え)		
前時・次時との学びをつないで	単元としての考え	生活とつないで
レベル4		
板書をなぞって、振り返りをアウトプットすること (上記の記述内容を語るができる。)		

このように振り返りを繰り返すことで、子どもは何を学び、何ができるようになったかを自覚することができる。また、分かっていないことも認識することでその後の学習の行い方を子どもは考えることができる。教師も、振り返りから今後の授業展開の工夫を行うことができる。

以上のような活動を連続して行うことで、単元を通して考えることができたり、見通しを持つことができたりすることによって、学習意欲を高めることができると考えている。